

麦跡湛水直播栽培における苗立密度と施肥法

県農業試験場 作物部 (現、農業研究センター農産園芸研究所作物部)

研究のねらい

米の需要供給の不均衡は拡大傾向にあり、生産の抑制と米価の引下げは一層強化されるものとみられる。このような情勢のなかで有利な稲作経営を行うには、生産コストを低減し、良質米の生産性を高めるとともに、生産規模の拡大を推進し、より効果的な技術体系を確立する必要がある。

これらのことから、水稻の省力栽培技術である湛水直播栽培について、稲麦一貫体系を前提とした安定栽培技術を確立するため、苗立密度と施肥法について研究を行った。

研究の成果

1. 平坦肥沃地での苗立数は、1 m²当り 60 ~ 80 本 (1a 当り播種量 : 乾籾 0.2 ~ 0.3kg : 苗立率 75 %) が適当である。
2. 苗立数が増加すると過繁茂となり、有効茎歩合の低下や1穂籾数の減少、あるいは倒伏の増加など、生育、収量が不安定となりやすいので、適正な苗立数となるように規定の播種量を守る。
3. 地力の比較的高い圃場の苗立密度と窒素施肥法についてみると、基肥窒素量は1 a 当り 0.3kg 程度でよく、苗立数が1 m²当り 50 本以下と著しく低下した場合は、早め (4 葉期まで) に分けつ肥を施用し茎数の確保を図る。
4. 1 m²当り 60 ~ 80 本の苗立数が確保されていれば、かならずしも分けつ肥を施用する必要はなく、有効茎歩合の向上、1穂籾数の確保、登熟歩合の向上をねらいとした穂首分化期以降の後期重点追肥が望ましい。
5. シンレイは穂首分化期に追肥を施用しても、受光態勢を悪化することは比較的少ないが、施用量が多過ぎないように窒素成分で1 a 当り 0.2kg 程度にとどめる。

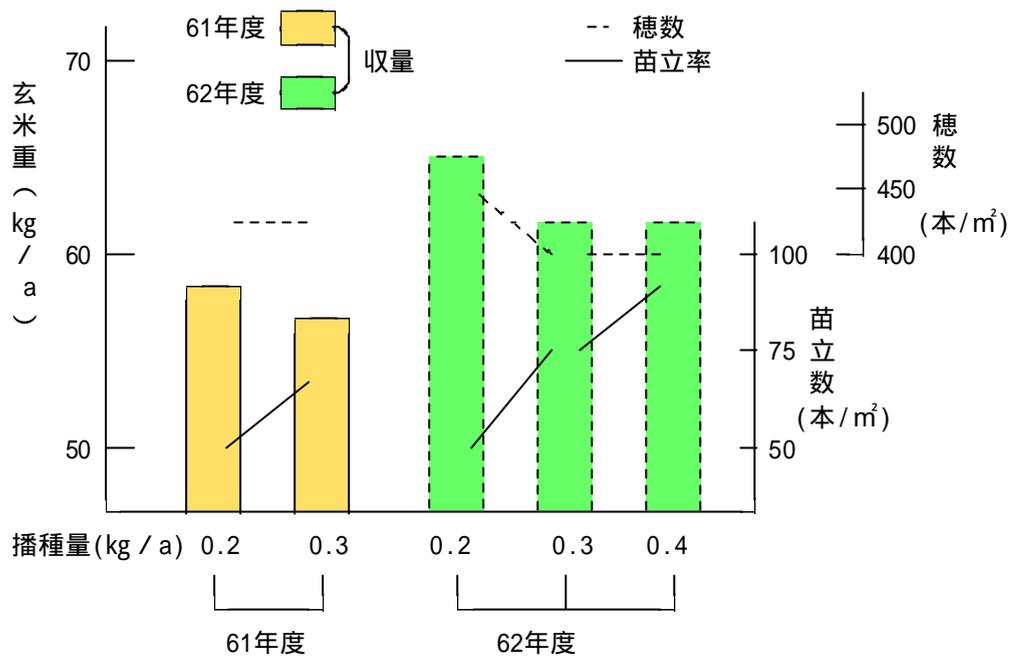
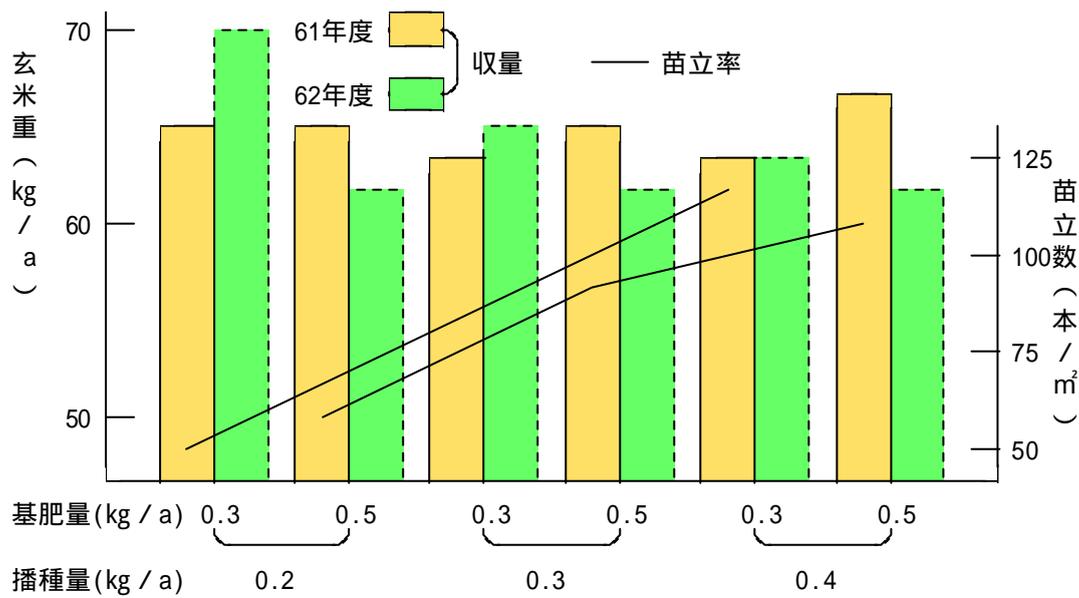


図1 苗立密度と生育収量



注) 追肥法

	分けつ期 (4葉)	穂首分化期 (-32日)	穂肥 (-25日)	晩期穂肥 (-12日)	実肥 (+5日)
61年度	0	0	0.3	0.2	0.2
62年度	0.3	0.2	0.3	0.2	0.2

図2 苗立密度・窒素施肥法と収量(62年)供試品種: シンレイ